

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1512 集

H A K A T A

博多 199

—博多遺跡群第248次調査報告—

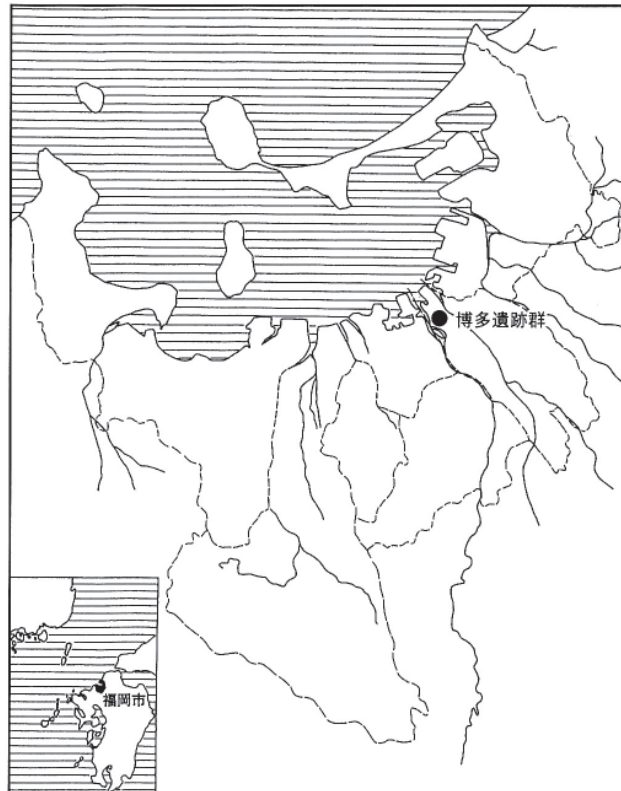
2 0 2 4

福岡市教育委員会

H A K A T A

博多 199

—博多遺跡群第248次調査報告—



遺跡略号 HKT-248
調査番号 2114

2024

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は集会場建設に伴い、博多区上川端町地内で実施した博多遺跡群第248次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物・土坑、平安時代末期の土坑、江戸時代の溝・石組遺構・瓦組井戸などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査委託者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は集会場建設に伴い、福岡市博多区上川端町地内において実施した博多遺跡群第248次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 竪穴建物 SC 溝 SD 井戸 SE 土坑 SK 石組・埋甕 SX
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎龍雄・木下博文が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より6°20′西偏する。
8. 中国産陶磁器の分類は、以下の文献によった。
太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財第49集 2000
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号	2114	遺跡略号	HKT-248	分布地図番号	049 天神
所在地	博多区上川端町47、48、49-2、12-2			調査面積	323.46㎡
調査期間	2021.6.22～2021.9.30				

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	4
第1面 溝・井戸・石組・埋甕・土坑	4
第2面 土坑・竪穴建物	10
その他の出土遺物	16
3 まとめ	16
図版1～9	17～25

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)	3
図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)	3
図4 第1面平面図 (S = 1 / 150)	5
図5 SD19および出土遺物実測図 (S = 1 / 60、1 / 3、1 / 2、1 / 1)	6
図6 SX36・37および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)	7
図7 SX23・68・81および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 10)	8
図8 SK85出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	9
図9 第2面平面および3区東壁土層断面図 (S = 1 / 150、1 / 60)	11
図10 SK38・56・74・91・93・97・103および出土遺物実測図 (S = 1 / 60、1 / 3、1 / 2)	12
図11 SK91・93・97・103出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 1)	13
図12 SC99実測図 (S = 1 / 60)	14
図13 SC99出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	15
図14 その他の出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	16

図版目次

図版1 1区第1面全景 (東から) SD19 (南東から) SD19 (西から) SD19土層断面 (南東から) SX36 (南西から)	17
図版2 SX36 (南東から) SX37上層 (北西から) SX37下層 (北東から) SX23 (南西から) 2区第1面全景 (北から)	18
図版3 SD19南端石組 (北西から) SX68 (北西から) SX81 (南東から) 1区第2面全景 (東から)	19
図版4 1区第2面西半部近景 (北から) SK56 (北西から) SK74 (南から) 2区第2面全景 (北から)	20
図版5 SK91 (南東から) SK93 (北西から) 3区第2面全景 (西から) 3区東壁 (南西から) SK97 (北東から)	21
図版6 SC99 (北から) 4区第2面全景 (北から) SK103 (北東から) SK38 (西から)	22
図版7 出土遺物1	23
図版8 出土遺物2	24
図版9 出土遺物3	25

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和3（2021）年4月21日付で、個人より博多区上川端町47、48、49-2、12-2地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 2021-2-64）。同地内は博多遺跡群の範囲内であり、平成28（2016）年7月19日に確認調査を実施し、地表面下75cmで遺構が確認されている。

今回同地内で集会場建設が計画されることとなり、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、令和3（2021）年6月上旬に現物提供により調査範囲の矢板打ちとバックホーによる表土の鋤取り・場外搬出を行った後、6月22日より着手した。6月22日に機材搬入、以降人力による遺構の検出・掘削に着手した。6月23日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、同年9月30日に終了した。

2 調査体制

調査委託	個人	
調査主体	福岡市教育委員会 (発掘調査 令和3年度 資料整理 令和4・5年度)	
調査総括	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 菅波 正人(令和3～5年度) 同課調査第1係長 本田 浩二郎(令和3～5年度)	
庶務	文化財活用課管理調整係 井手 瑞江(令和3年度) 内藤 愛(令和3～5年度)	
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長 田上 勇一郎(令和3～5年度) 同課事前審査係主任文化財主事 森本 幹彦(令和3・4年度) 同課事前審査係 板倉 有大(令和5年度) 山本 晃平(令和3年度) 三浦 悠葵(令和4年度) 三浦 萌(令和5年度)	
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係 木下 博文	

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りを息浜(おきのはま)、内陸の2列を博多浜と呼称している。現状はJR博多駅から真っすぐ海側に向かって伸びる大博通りを中心とし、高層のマンション・ビルが立ち並ぶ中、古くからの町割りが残る区域となっている。

248次調査地点は、遺跡の南西部、博多浜の海側砂丘上にあたり、櫛田神社の北隣に位置する。道路を挟んだ北西側の冷泉小学校跡地に221次、その北に56次、北側に70次・139・189次、南側に19次、東側に80次・97次の各調査地点が位置する。

当地域は砂丘上の高所に位置し、189次調査地点では現地表下130 c m、標高3.6mで地山の黄褐色砂丘面を検出している。この面では弥生時代～古墳時代前期の甕棺墓・竪穴建物が検出される（80・97次）。次に奈良時代～平安時代前期には官衙的施設の存在がうかがえ（139次）、ピークを迎えるのが中世、12～15世紀である。特筆すべき遺構・遺物としては12世紀の港湾施設とみられる石積護岸（221次）、13世紀末～14世紀の銅製品鑄造遺構（80・97次）や遺物（80・139次）がある。未確認ながら、櫛田神社より東側は13世紀末に設置された鎮西探題の候補地である。櫛田神社関連として「櫛田宮」銘軒瓦が出土している（70・80・139・221次）。

下って近世には鉄製品鑄造関連の遺構・遺物が目立つ。56次調査地点は鑄物師磯野・深見家の工場の所在地または近接地とされる。炉跡（70次）、瓦組井戸に廃棄された大量の炉壁・鉄滓（139次）がある。他に国体道路沿い北側、現ダイワロイヤルホテルに位置する213次調査では、博多人形を制作した中ノ子家の窯跡が検出されている。

- 56次 『博多34』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集 1993
- 70次 『博多41』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第370集 1994
- 80次 『博多51』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集 1996
- 97次 『博多63』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第558集 1998
- 139次 『博多98』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第807集 2004
- 189次 『福岡市埋蔵文化財年報』 VOL.24 2010
- 213次 『博多192』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1480集 2023
- 221次 『博多190』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1467集 2023 以下続刊

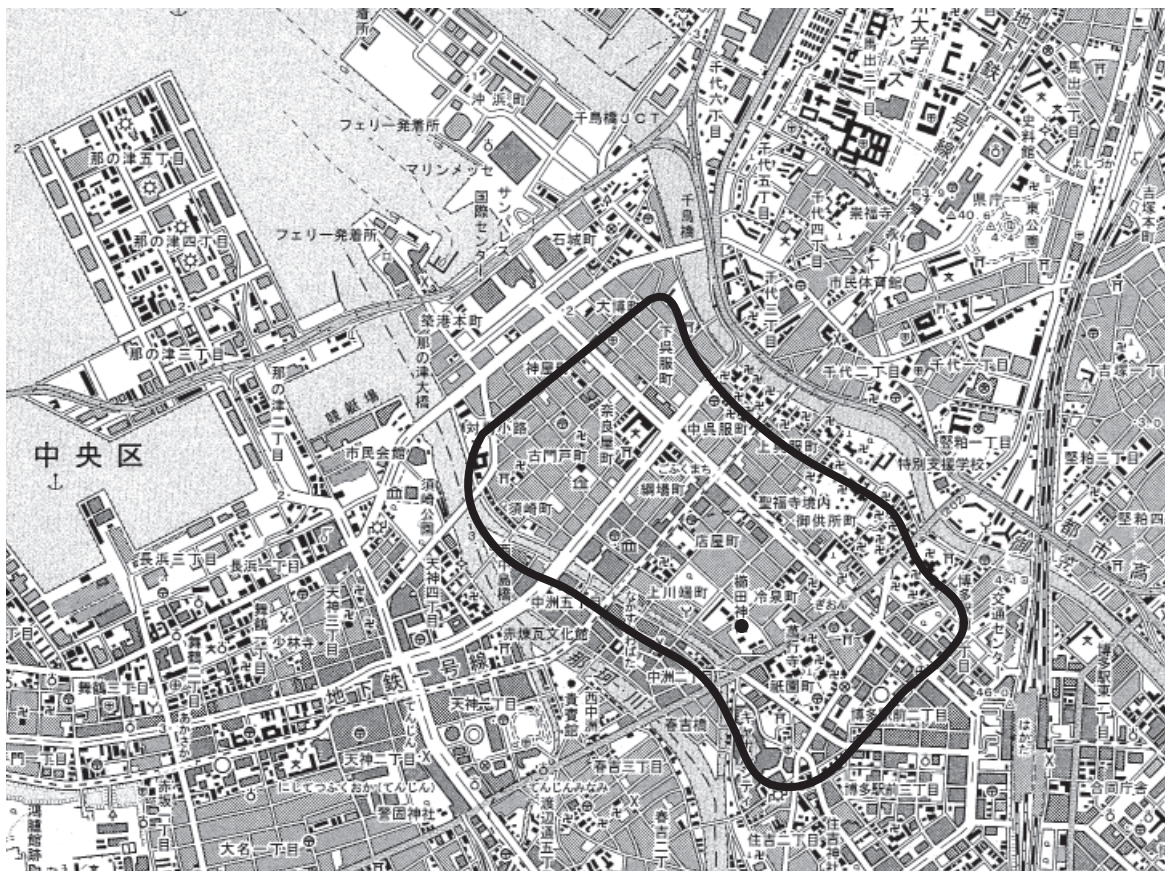


図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

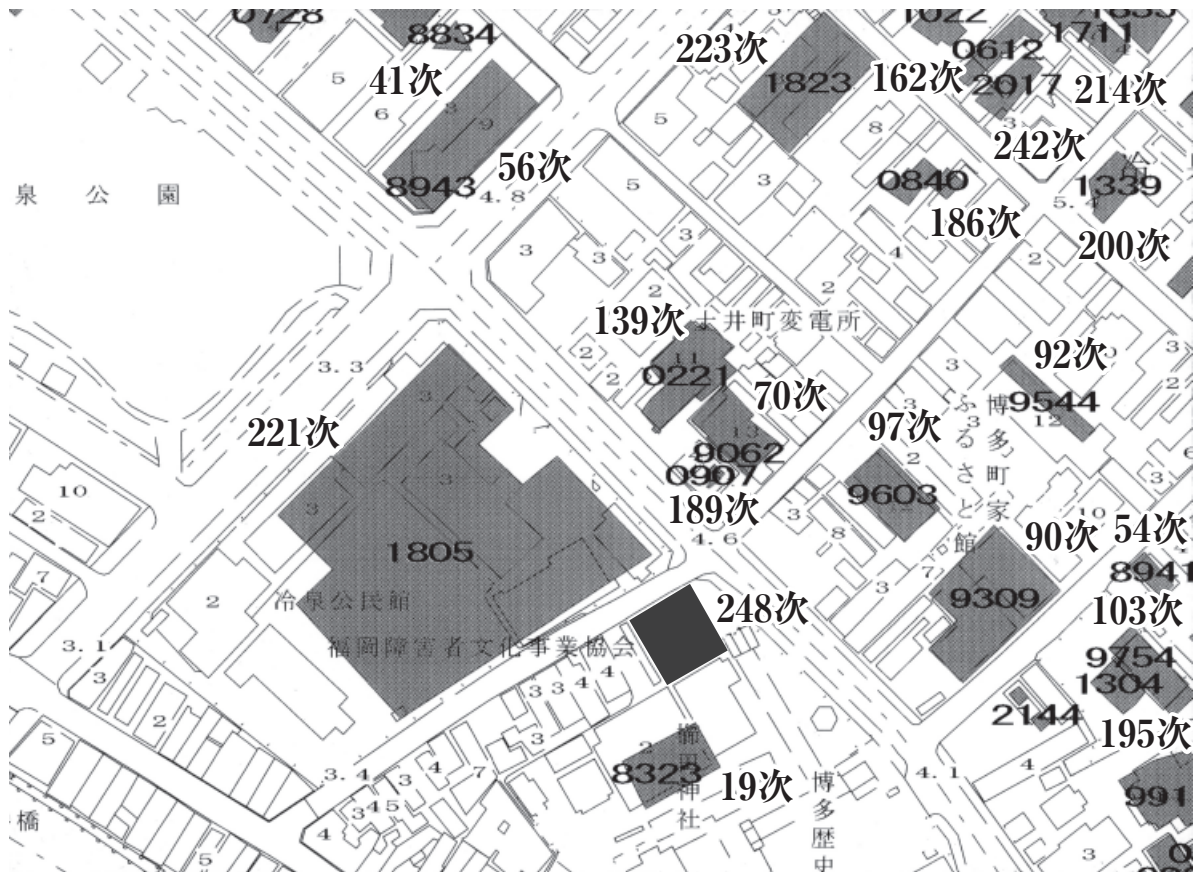


図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)

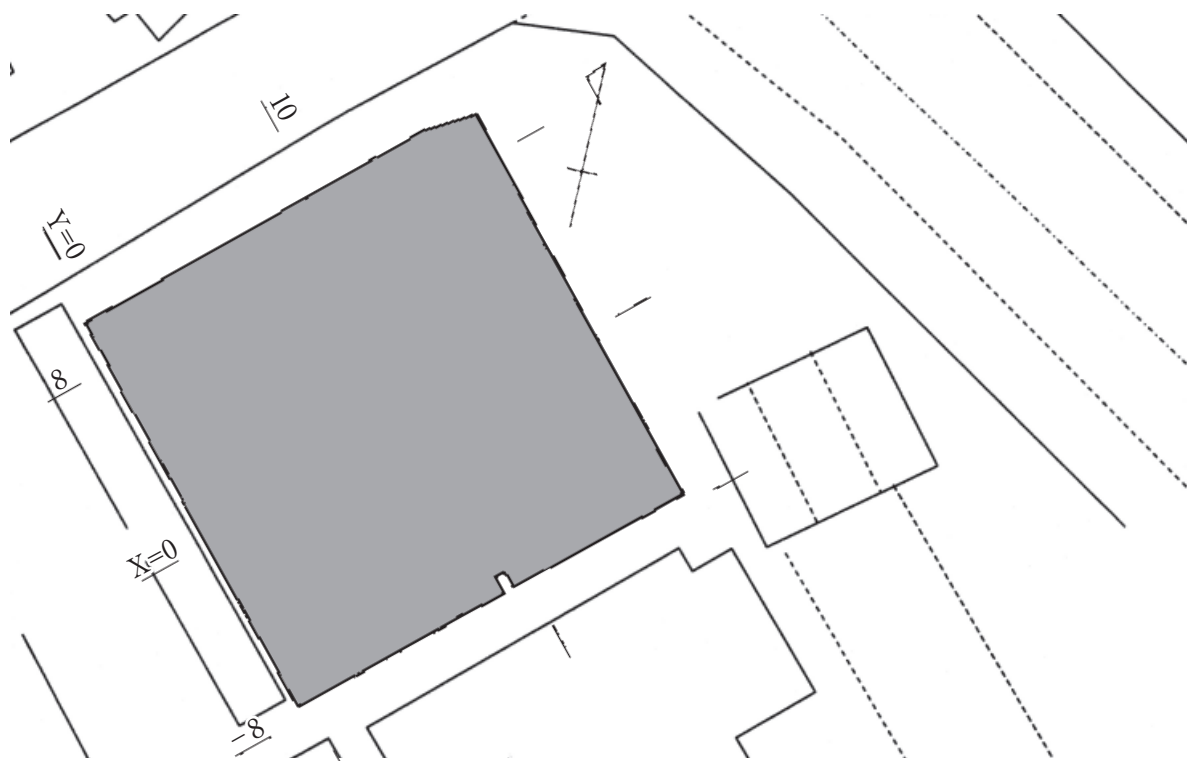


図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西に位置し、現地表面の標高は4.5～4.6mである。

排土処理のため、調査区を東西南北に4分し、西半北側を1区、西半南側を2区、東半南側を3区、東半北側を4区とし、1区から開始した。表土は事前に現地表面下80cmまで重機で除去し、H鋼と鋼板による土留めを行った。それ以下は鋼板が入らないため、1m幅の犬走りを取り掘り下げた。

精査は表土鋤取り面を第1面として開始し、計2面の調査を行った。

第1面(図4)は標高3.6m、検出遺構は溝・井戸・石組・埋甕・土坑である。出土遺物は寛永通宝計21点・伊万里産磁器・瓦のほか、鉄製品・鑄造関連遺物(鉄滓・炉壁・鑄型)や土製人形の型・製品などである。周辺調査の成果とも比較して、全て近世、江戸時代前期より後のものとみられる。それらの掘り込みは下の第2面の砂丘に達しているものが多く、攪乱の様相を呈しており、その間に明瞭な遺構面は認められない。遺構のプランも把握しがたい。また調査予算の関係から、第1面の精査は1・2区のみ実施し、第2面までの面下げは重機を使用した。

第2面(図9)は博多遺跡群の地山である黄白色ないし褐色砂層上面で標高3.1m、検出遺構は竪穴建物・土坑・ピットである。砂丘面は西・南・東に向かってわずかに下がっており、調査区西半および3区には暗褐色砂層が堆積し、弥生時代終末～古墳時代前期を上限とする土器が含まれる。3区では古墳時代前期の竪穴建物1を検出した。出土遺物は中国産陶磁器、中国銅銭、土師器、須恵器、鉄製品である。

出土遺物の総量はコンテナ60箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

第1面

溝

SD19 (図5、図版1)

調査区の真ん中を南北方向に走る溝で、幅1.3m、深さ0.5mである。溝の東肩・南端肩に護岸とみられる大石が1段分、部分的に残存する。埋土は最上層に鉄滓、それ以下は灰色土が堆積し、近世瓦片が多数含まれている。溝の位置・走向は櫛田神社の土地境界に一致しており、石列が櫛田神社側にしか見られないことから、近世の櫛田神社に関わる遺構の可能性が考えられる。

出土遺物(図5、図版7)

1・2は肥前磁器。1は小椀、底部外面に「大明成化年製」銘がある。2は仏飯器。17世紀末～18世紀後半のもの。3は銅銭の寛永通宝。SD19では計2点出土している。4はガラス小玉。径1.1cm、暗緑色を呈す。

井戸

SE04 (図4)

1区と2区の境界で検出。瓦組の井戸側を持つ。江戸時代に属す。

SE86 (図4)

2区で検出。瓦組の井戸側を持つ。江戸時代に属す。

道路境界

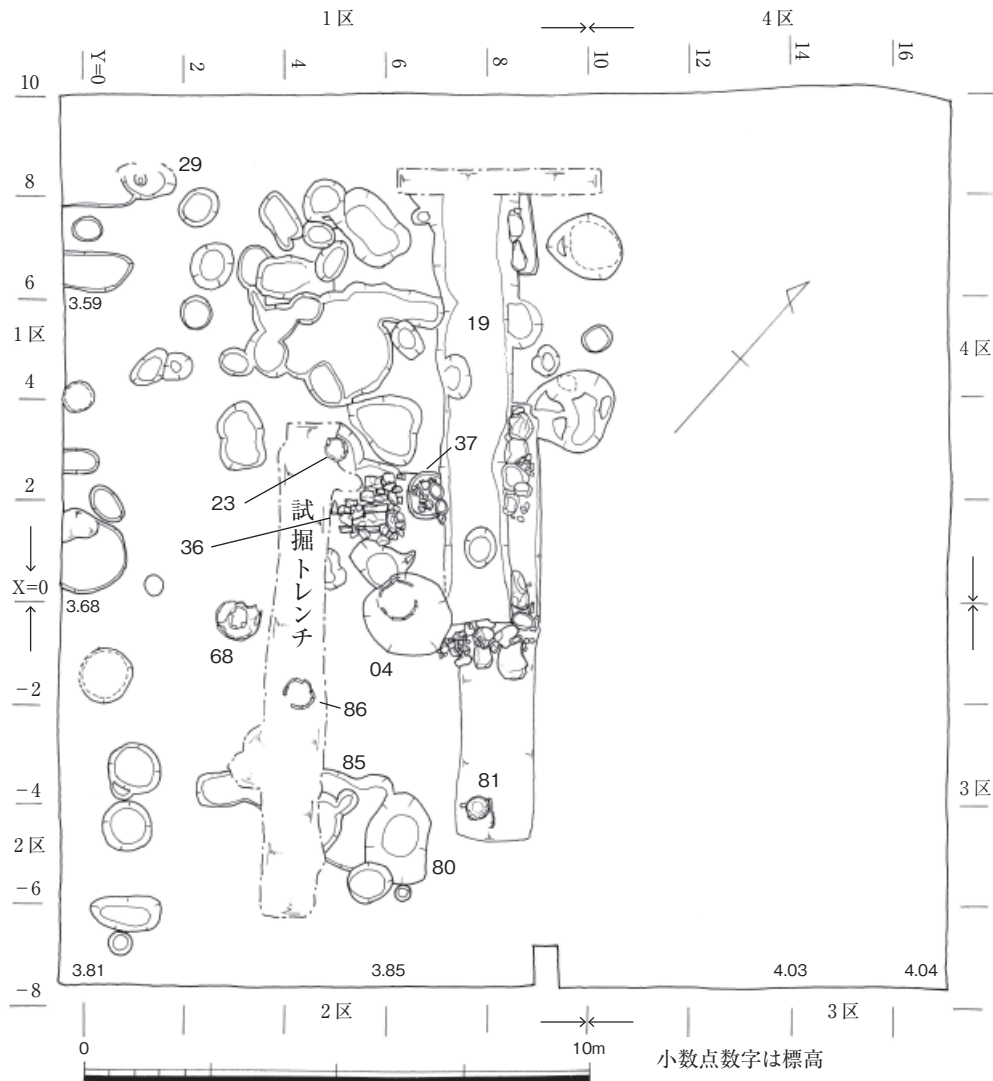


図4 第1面平面図 (S = 1 / 150)

石組

SX36 (図6、図版1・2)

1区、SD19の西側で検出。掘形は1.4m四方の隅丸方形で、底面に平瓦・平石を敷き、周囲は礫で囲み、掘形壁との隙間には黄褐色粘質土を充填する。埋土は焼土・炭混じりである。

出土遺物 (図6、図版7)

5は白磁紅皿。口径4.2cm、高さ1.6cmで型打成形。6は巴文軒丸瓦。

SX37 (図6、図版2)

1区、SD19とSX36との間で検出。90×60cmの範囲に大きめの玉石を充填、その周囲を固めるように瓦片を置く。

出土遺物 (図6)

7は染付小椀。外面高台内に「朝」字がある。19世紀前半。8は陶器鉢。内面は暗赤褐色で煤が付着。

埋甕

S X 23 (図4、図版2)

1区、S X 36の西で検出。胴径42 c mの平底甕を直立して埋置している。

出土遺物 (図7)

9は素焼陶器甕。残存高51.8 c m。明黄褐色を呈し、内外面にハケ目を施す。

S X 68 (図7、図版3)

2区、S E 04の西で検出。胴径87 c mの平底甕を直立して埋置している。底は抜けて残存しない。

出土遺物 (図7)

11は素焼大甕。残存高102 c m。褐灰色～にぶい黄橙色を呈し、内外面にハケ目を施す。

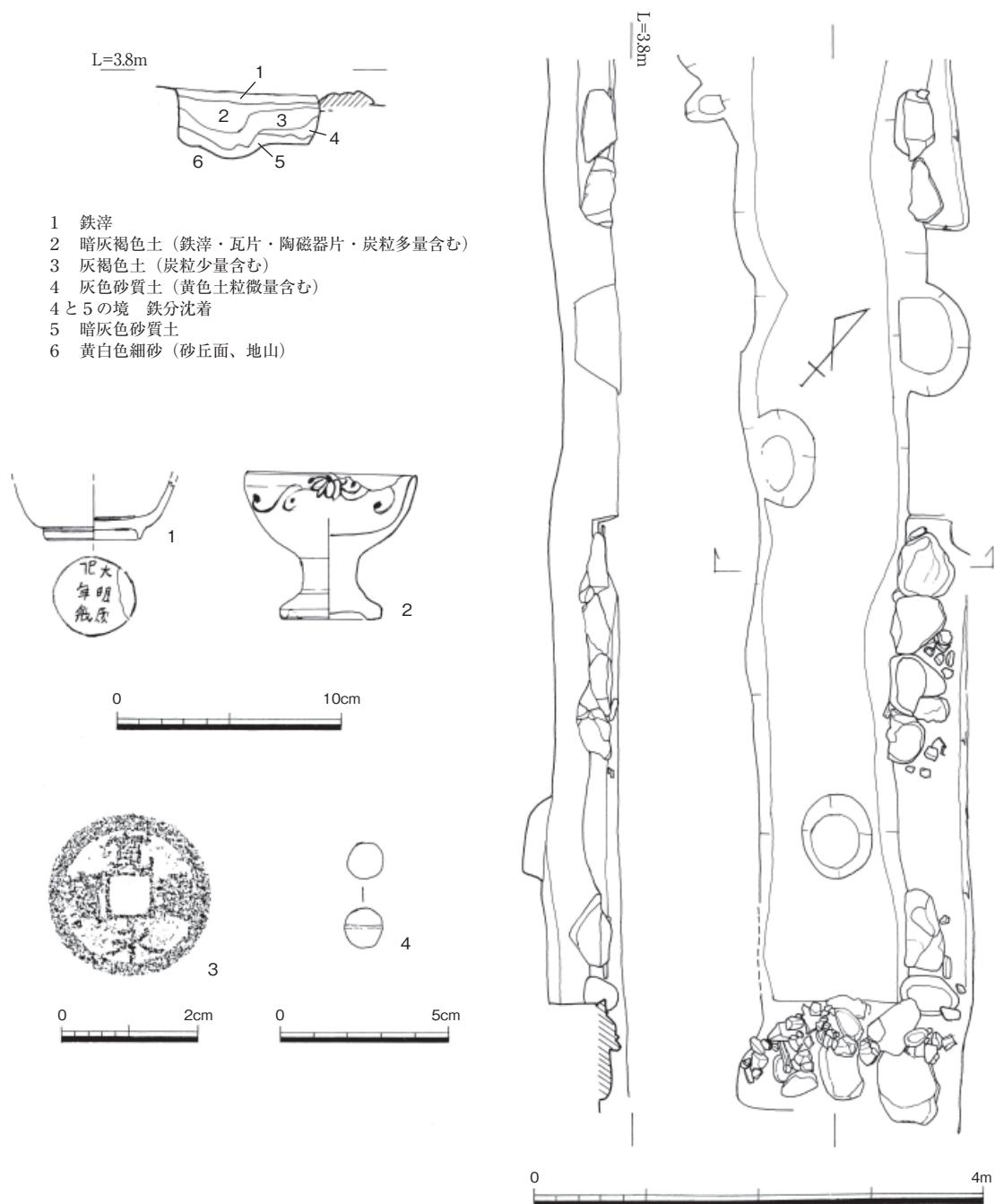


図5 S D 19および出土遺物実測図 (S = 1 / 60、1 / 3、1 / 2、1 / 1)

SX81 (図7、図版3)

2区で検出。胴径48cmの平底甕を直立して埋置している。

出土遺物 (図7)

10は素焼陶器甕。残存高44cm。外面下半は埋没していたため傷みが激しく、上半は丁寧なで調整である。

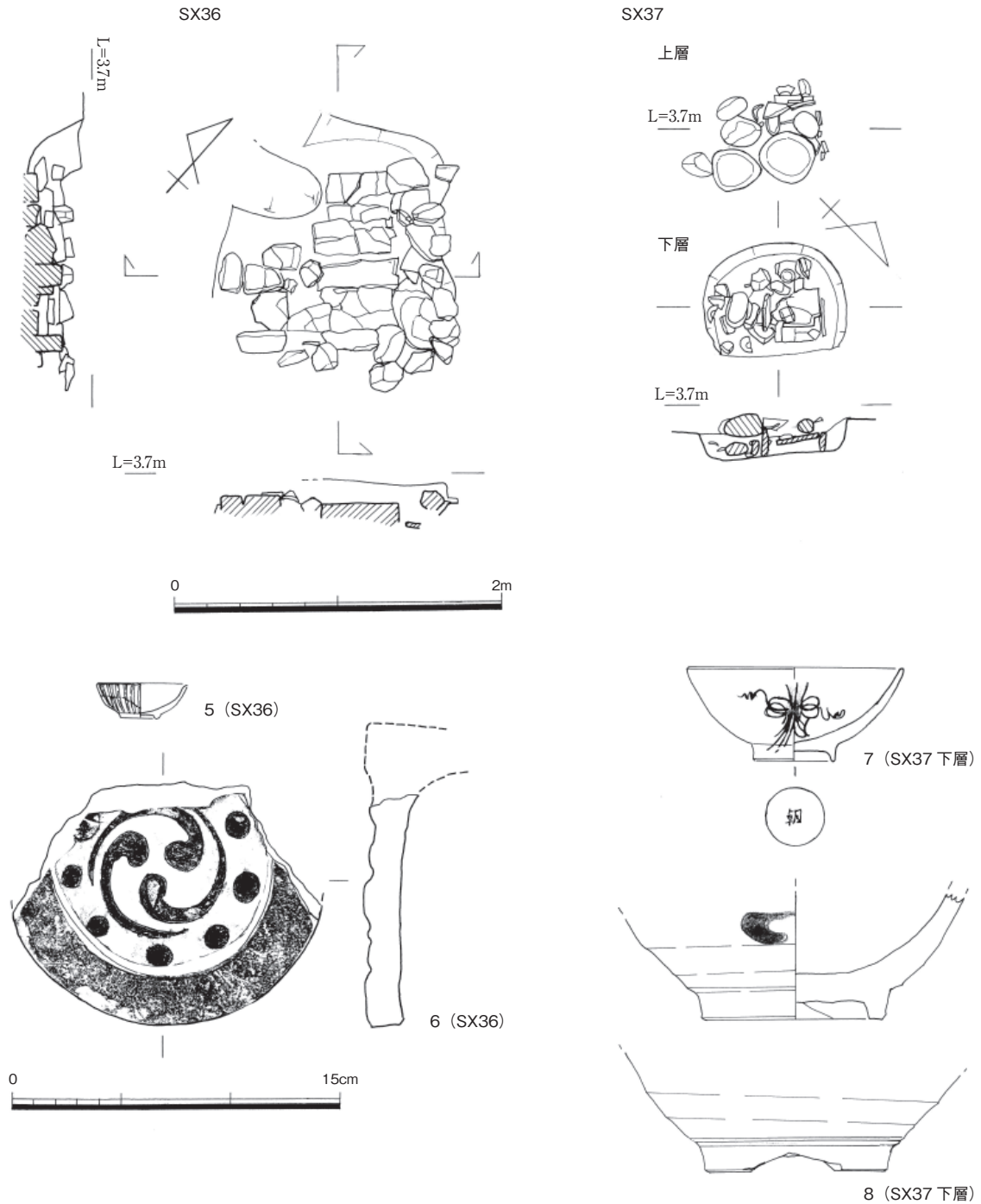


図6 SX36・37および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)

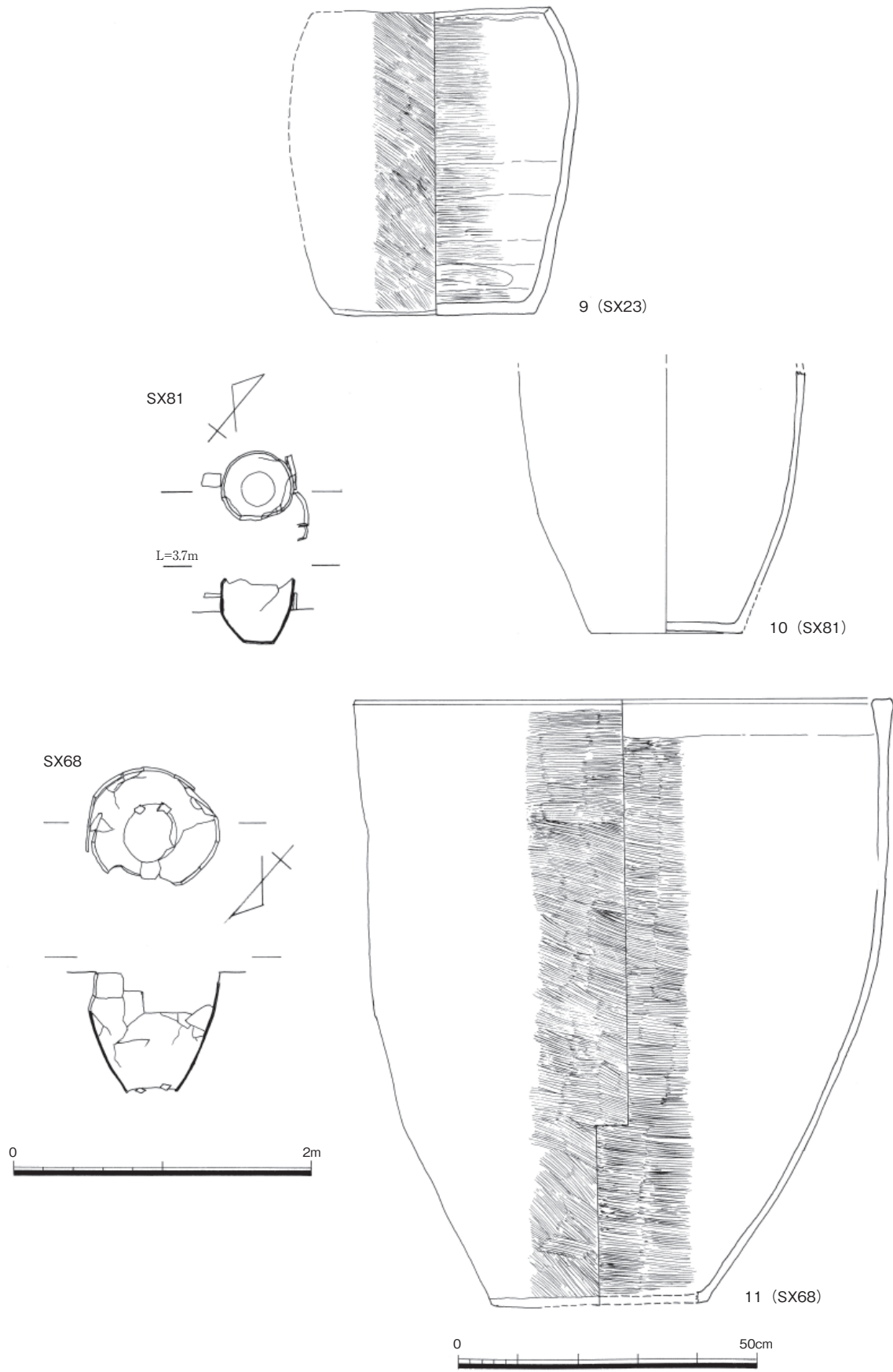


図7 S X23・68・81および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 10)

土坑

SK80・85 (図4)

2区で検出。80は1.8×1.2mの楕円形で、深さ0.5m。81は80の西に接し、深さ0.2～0.3mの方形。一体のものともみられる。土製人形の型・製品がまとまって出土している。

出土遺物 (図8、図版7)

12は猿形土製品。残存高5.5cm。三猿を表したものか。13は土製人形の型。組み合わせ式で、内面に鎧武者を刻み、外面にヘラによる刻字がある。金毘羅宮に関わるものか。以上SK80の出土。

14・15は土製人形の製品。14は天神様の顔。長さ11.5cm、にぶい橙色を呈し、内面に粘土の指抑え痕が残る。15は衣冠束帯姿の神または神官。にぶい褐色を呈し、外面に胡粉の痕跡がある。16は土製人形の型。にぶい黄橙色を呈し、内面に鎧兜姿の武者を表し、胡粉が残る。

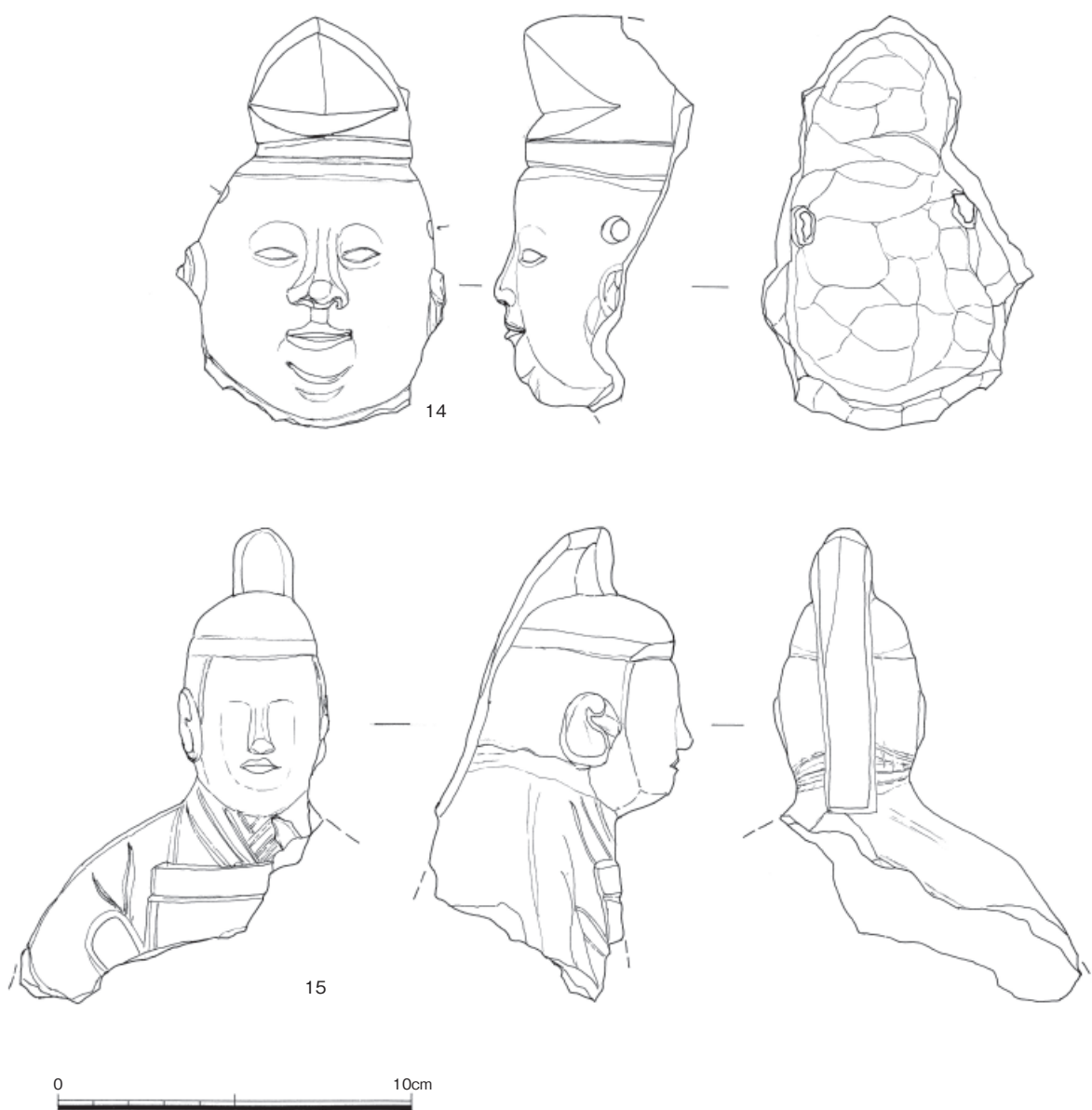


図8 SK85出土遺物実測図 (S = 1 / 2)

第2面

土坑

SK38 (図10、図版6)

調査区北壁際、1・4区にまたがって検出。径2m強の円形で、深さ0.8m。

出土遺物 (図10)

17は土師器杯。復元口径16.6cm、器高2.5cm。橙色を呈し、底部外面に回転糸切り痕・板状圧痕がある。

SK56 (図10、図版4)

1区、調査区北壁際で検出。径1.6～1.7mの不整円形で、深さ1.3m。

出土遺物 (図10)

18は土師器杯。にぶい橙色を呈し、底部外面は回転糸切り。体部下端に3条の沈線を施す。19は白磁壺。

SK74 (図10、図版4)

1区で検出。径1.6～1.7mの円形で、深さ0.66m。

出土遺物 (図10、図版8)

20は滑石製鍋。21は鉄釘。長さ6.7cm、頭部が直角に曲がり、一辺0.7cmの角形とみられる。

SK91 (図10、図版5)

2区で検出。1.75×2m以上の楕円形で、深さ0.5m。完形の布留式土師器壺(22)・小型丸底壺(23・24)が、底より浮いた位置で口縁部を下にして出土しており、特に小型丸底壺は24の中に23が横倒しで入れ子になっていた。古墳時代前期に属す。

出土遺物 (図11、図版8)

22～26は古式土師器。22は布留式甕。口径14.4cm、器高18.1cm。灰黄褐色を呈し、口頸部が内外面ともに赤く焼けている。23～25は小型丸底壺。ともにヘラミガキ・削り、なで、ハケ目を施し、平滑に仕上げている。23は明褐色、24は明黄褐色、25は橙色を呈す。25は内外面に煤が付着。26は高杯。口径22.0cm、器高14.5cm。橙色を呈し、細かいハケ目を施し、脚部内面に絞り痕が残る。

SK93 (図10、図版5)

2区で検出。1.3×1.5mの楕円形で、深さ0.53m。平安時代末期に属す。

出土遺物 (図11、図版8)

27は土師器皿。橙色を呈し、底部外面に回転糸切り痕、板状圧痕がある。28は龍泉窯系青磁碗。大宰府分類I-3a類(12世紀中頃～後半)に当たる。

SK97 (図10、図版5)

3区東壁際で検出。SC99を切る。1.25×0.82mの楕円形で、深さ0.45m。平安時代末期に属す。

出土遺物 (図11、図版8)

29・30は土師器。29は皿。黄褐色を呈し、底部外面は回転糸切り。30は杯。にぶい黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切り、板状圧痕がある。31は銅銭の大観通宝(北宋 大観元(1107)年初鑄)。

SK103 (図10、図版6)

4区で検出。SK104に切られる。2.15×1.7mの楕円形で、深さ0.68m。平安時代末期に属す。

出土遺物 (図11、図版8)

32は土師器皿。にぶい橙色を呈し、底部外面は回転ヘラ切り。33は白磁碗。大宰府分類Ⅳ-1 a類(11世紀後半～12世紀前半)に当たる。34は土師器碗。にぶい黄色を呈し、内外面にヘラミガキを施す。35は瓦玉。打ち欠いて白磁碗の高台部を転用。

道路境界

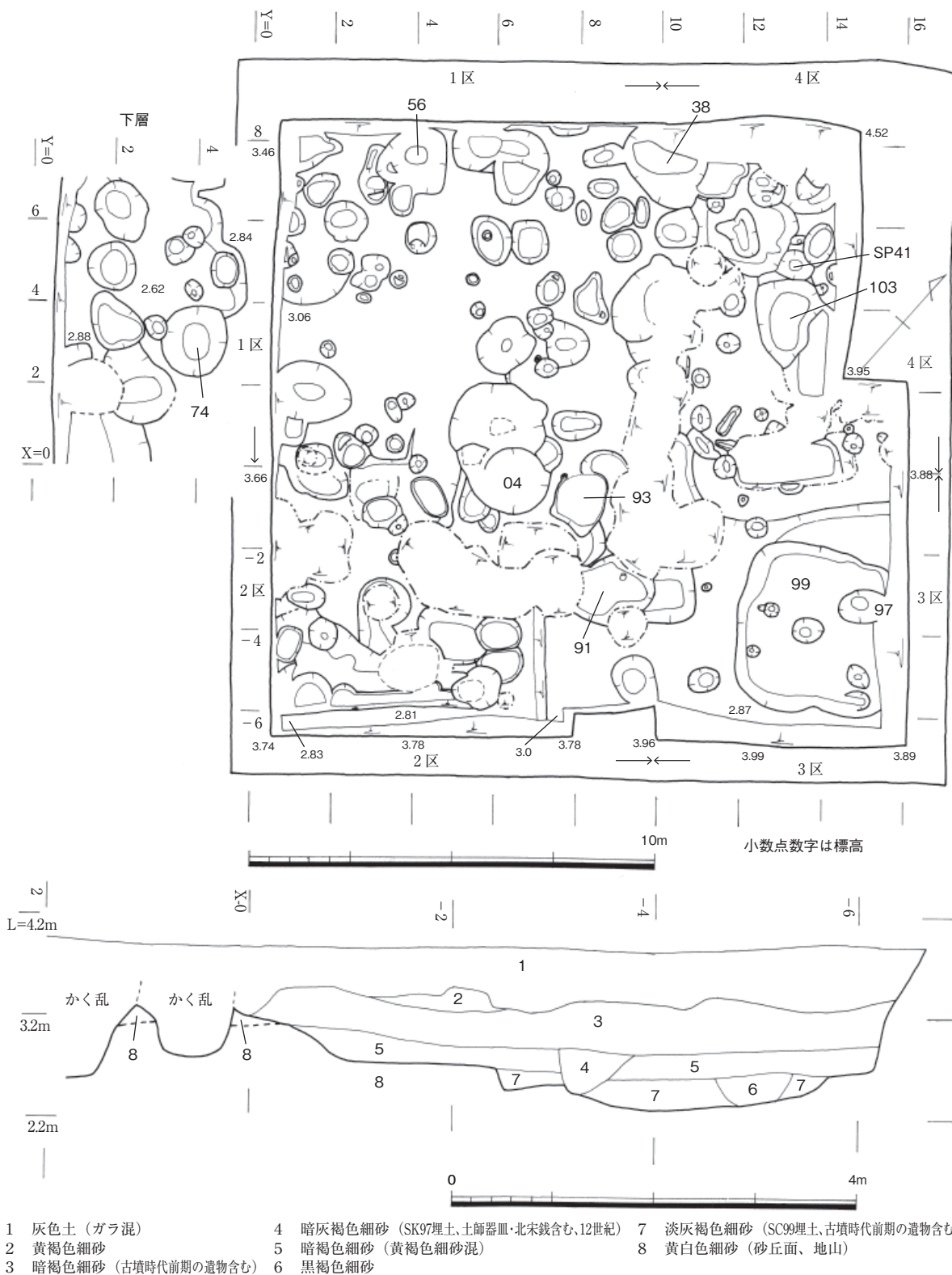


図9 第2面平面および3区東壁土層断面図 (S = 1 / 150、1 / 60)

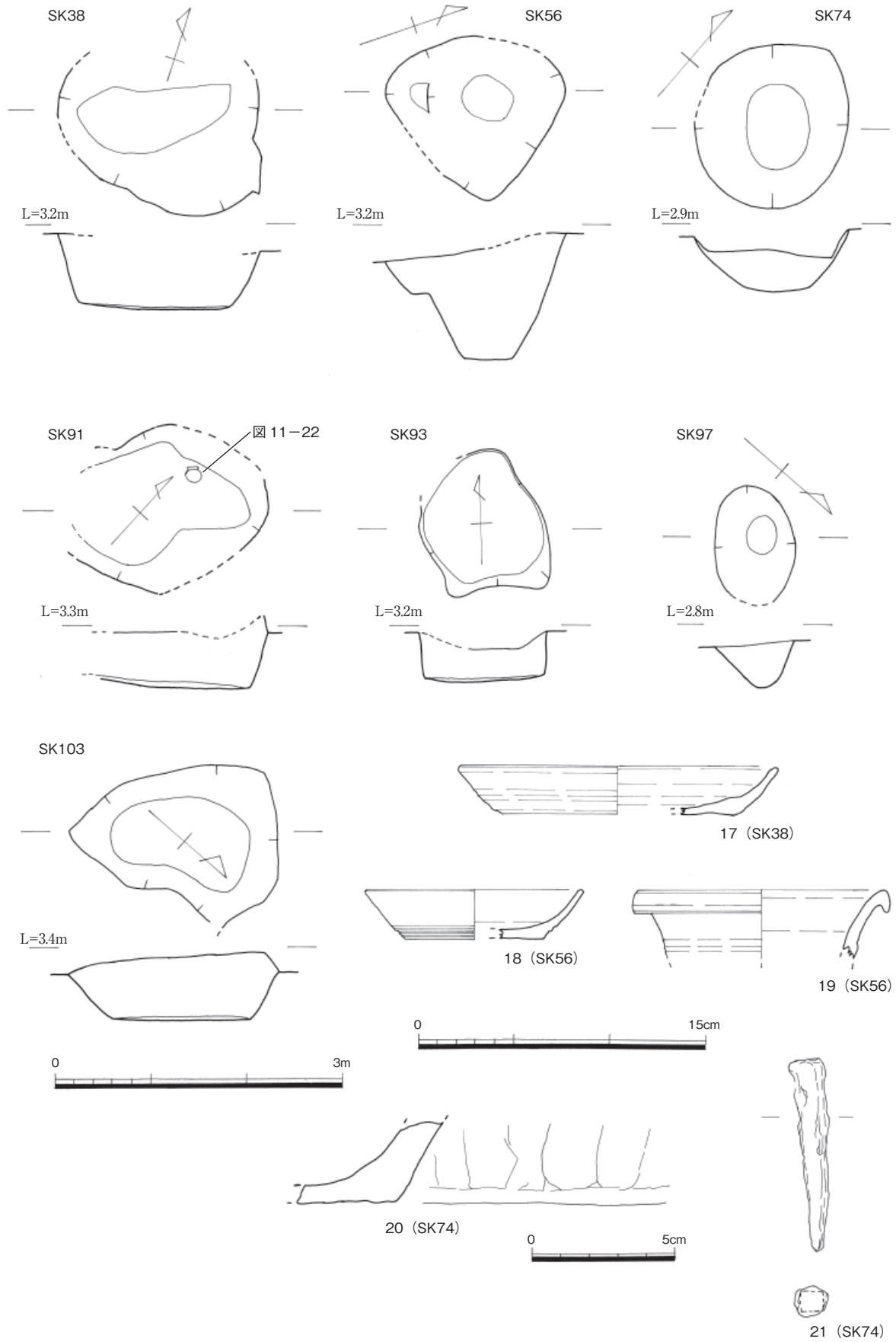


図10 SK38・56・74・91・93・97・103および出土遺物実測図 (S = 1/60、1/3、1/2)

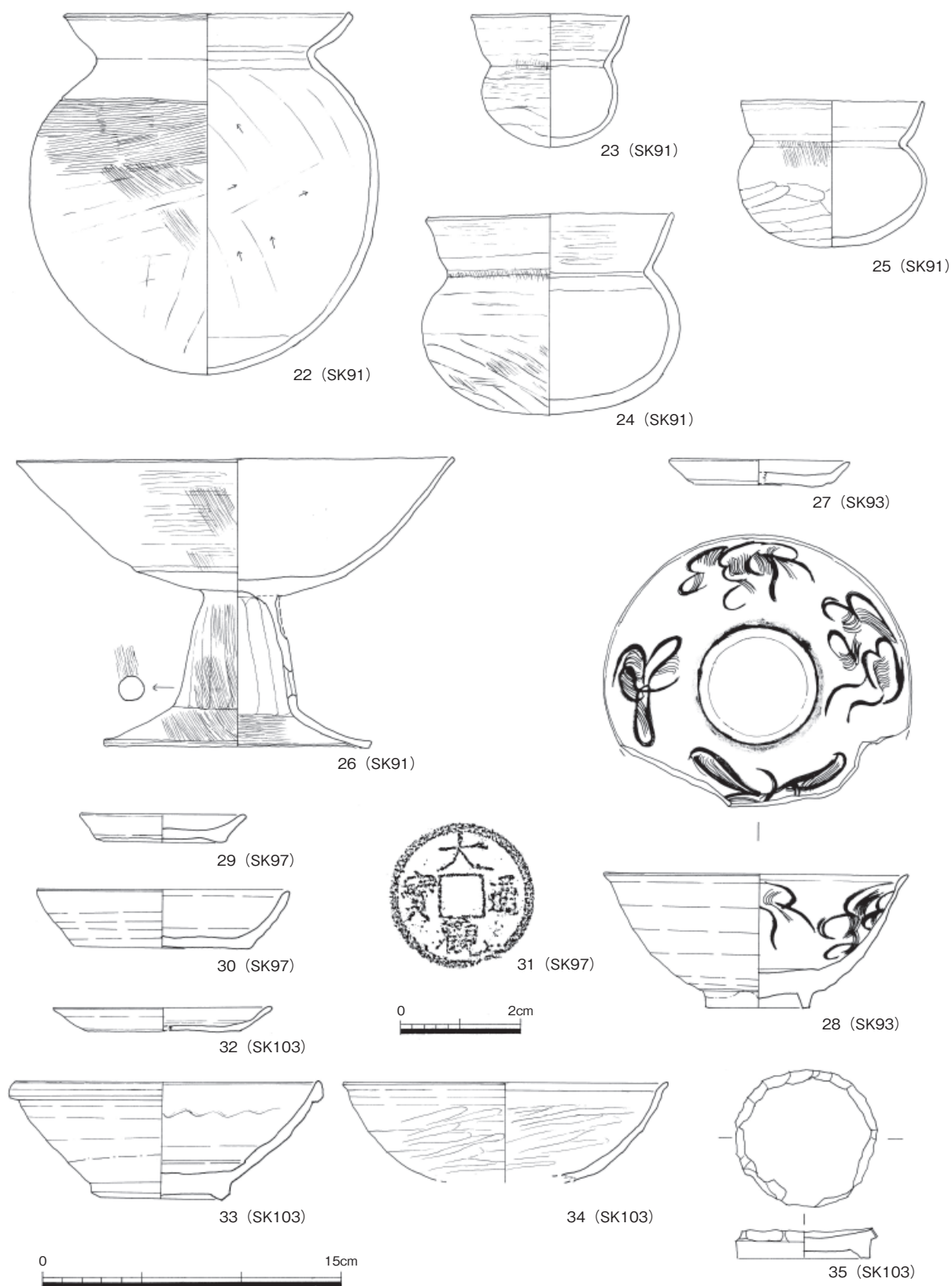


图11 S K 91 · 93 · 97 · 103出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 1)

竪穴建物

SC99 (図12、図版6)

3区東壁際で検出。SK97に切られる。一辺4mの方形で、深さ0.3～0.5m。ピットは中央に1ヶ所認められるが、建物全体の柱構造は不明。出土遺物から古墳時代前期に属す。

出土遺物 (図13、図版9)

36～46は古式土師器。36～38は二重口縁壺。36はにぶい褐色を呈し、内外面に煤が付着。口縁部下端に竹管文を施す。畿内系。37は明黄褐色、38は化粧土の塗布により明赤褐色を呈す。ともに山陰系。39は布留式甕。復元口径14.2cm、残存高17cm。体部外面はハケ目、内面はヘラ削り、肩部に波状沈線を施す。40は小型器台。復元口径10cm。橙色を呈し、丁寧な横方向のヘラミガキを施す。41は小型丸底壺。復元口径12.5cm、残存高5.5cm。内面は赤褐色、外面は明緑灰色を呈し、外面にヘラミガキを施す。42は高杯の脚部。復元底径12.4cm、残存高8.1cm。にぶい褐色を呈し、外面にハケ目を施す。43は鉢。口径12.4cm、器高3.9cm。橙色を呈し、外面から内面上半に丁寧なヘラミガキ、底部内面に放射状のハケ目を施す。44は鉢。口径14.4cm、器高8.7cm。にぶい褐色～黒色を呈し、内外面に粗いハケ目を施し、煤が付着。胎土も粗い。45は小型甕。口径12cm、残存高13.6cm。にぶい黄橙色を呈し、体部外面に粗いハケ目、内面にヘラ削りを施す。外面に煤が付着。46は製塩土器の脚部。復元底径4.2cm、残存高2.2cm。外面は暗褐灰色、内面はにぶい赤褐色を呈す。備讃瀬戸または芸予諸島系。

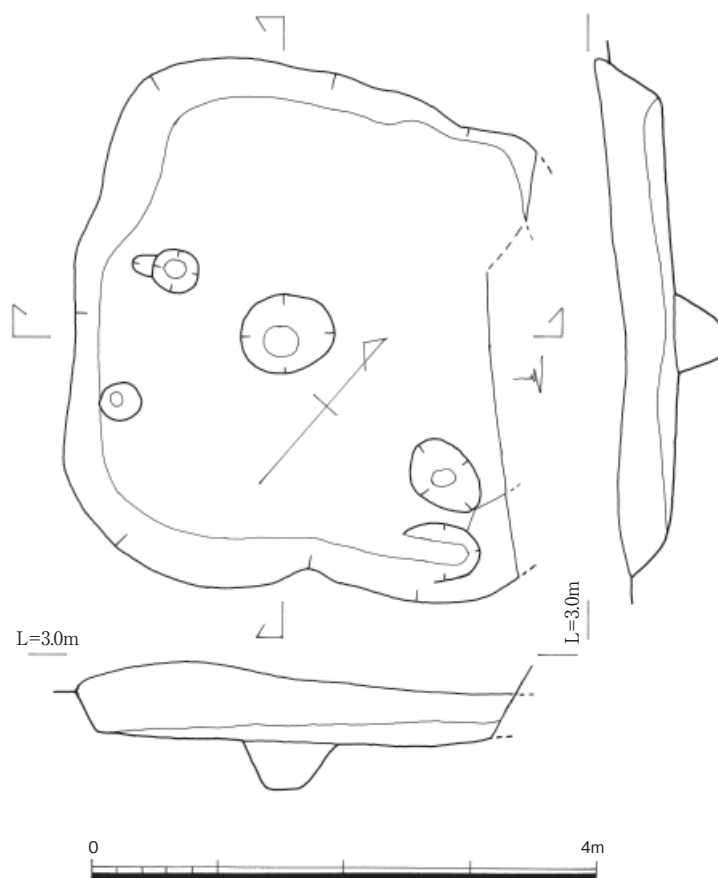


図12 SC99実測図 (S = 1 / 60)

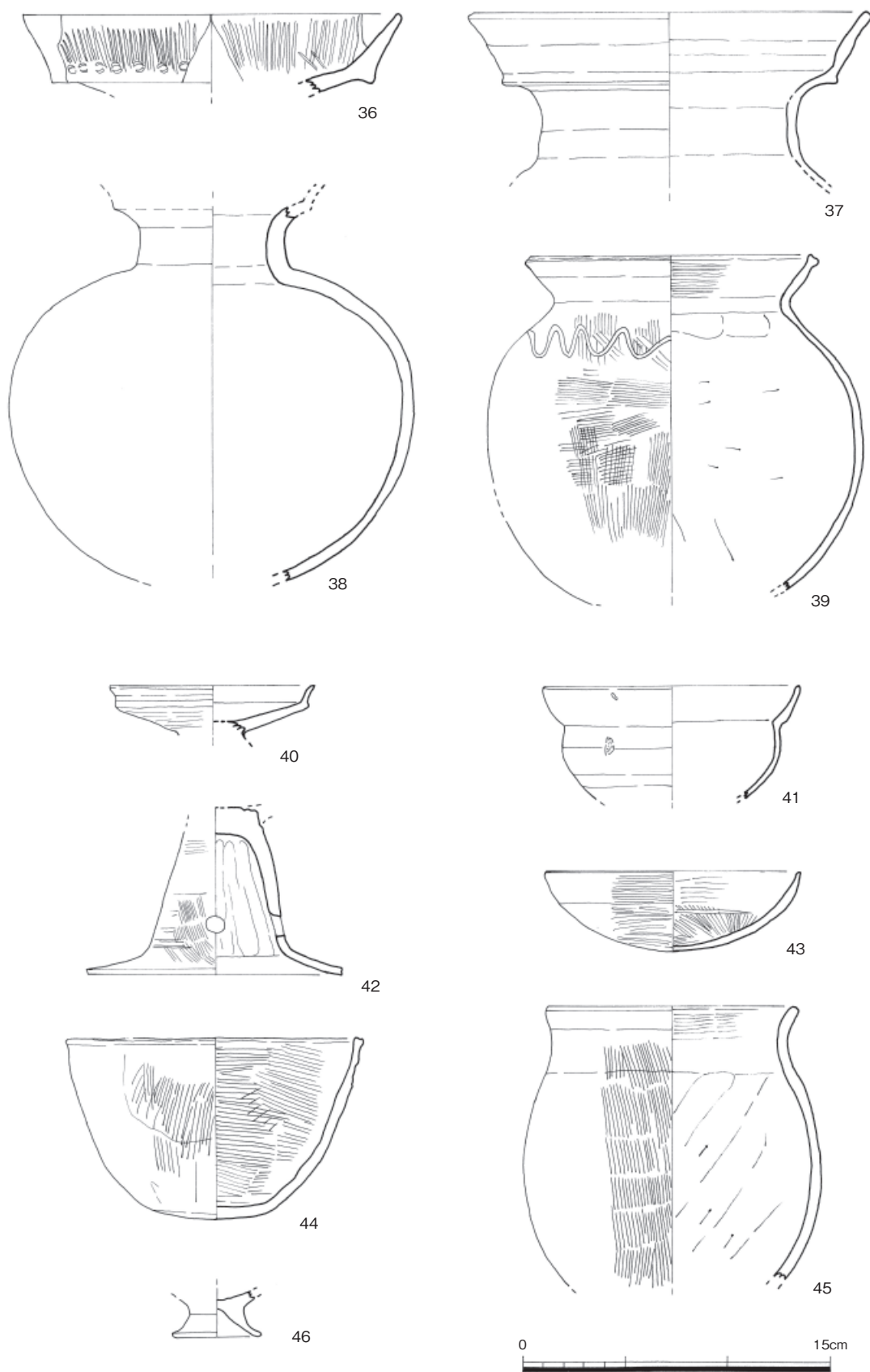


图13 S C 99出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

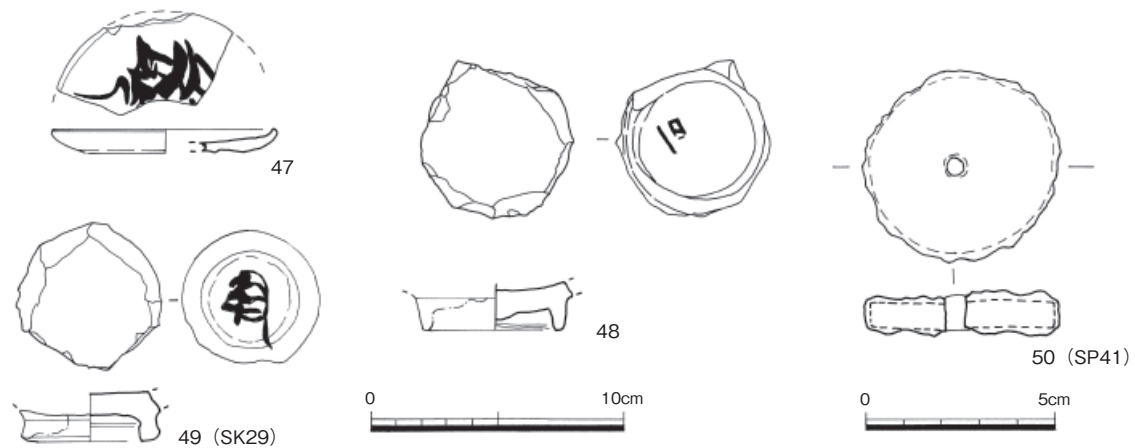


図14 その他の出土遺物実測図（S = 1 / 3、1 / 2）

その他の出土遺物（図14、図版9）

47は土師器皿。底部内面に不明の墨書文様がある。底部外面は回転糸切り。48は瓦玉。打ち欠いて白磁碗の高台部を転用。底部外面に墨書がある。2区第2面暗褐色砂層出土。49は瓦玉。打ち欠いて黒褐色施釉陶器の高台部を転用。底部外面に花押とみられる墨書がある。1区第1面S K29。50は鉄製紡錘車か。径4.8 c m、孔径0.5 c m。4区S P41出土。

3 まとめ

本調査では計2面の調査を行い、古墳時代前期～近世の遺構・遺物を検出した。各時代の要点を述べてまとめとしたい。

第1面は近世である。この面のみで寛永通宝が計21点出土している。調査区の中央で検出した南北溝S D19を境に西側に廃棄土坑があり、土製人形の型・製品のほか、鉄製品鑄造に関わる鉄滓・炉壁・鑄型が出土している。これらは56次および213次の調査成果との比較から、博多人形師の中ノ子家、鑄物師の磯野・深見家と関わる遺構とみられる。廃棄物処理場であったのではなかろうか。18世紀～19世紀前半とみられる。

第1面より50 c m下で第2面、地山の黄褐色砂丘面となる。189次調査地点と比べ50 c m低い、それでも北西側の221次調査地点からはかなり高い。途中に古代・中世の遺構面がみられない。櫛田神社北神門付近には古墳時代前期の遺物を含む暗褐色細砂層が残存し、これを平安時代末期の土坑が切り込んでいる。砂丘面では、平安時代末期の土坑のほか古墳時代前期の竪穴建物・土坑を検出した。97次調査地点で検出された集落の範囲が当地点まで広がるのであろう。古墳時代前期の出土土器は畿内・山陰などの外来系が主体となっている。その中で1点のみ、備讃瀬戸もしくは芸予諸島系製塩土器の脚部を確認した。福岡市内では今宿遺跡、今山遺跡、今津A遺跡2次（筆者調査担当、2025年度報告予定）で確認されているが、博多遺跡群内では初とみられる。1点のみのため当地で製塩を行ったわけではなく持ち込みとみられるが、どのような背景があるのか興味深い事例である。今後博多遺跡群内のうち古墳時代前期の遺構・遺物が多く出土する区域においては、注意が必要と思われる。

以上、周辺の調査成果と合わせてみると、古墳時代前期から近世まで、金属鑄造など生産関連遺構が当該区域では継続しており、伝統となっている様子がうかがえる。



1区第1面全景（東から）



S D19（南東から）



S D19（西から）



S D19土層断面（南東から）

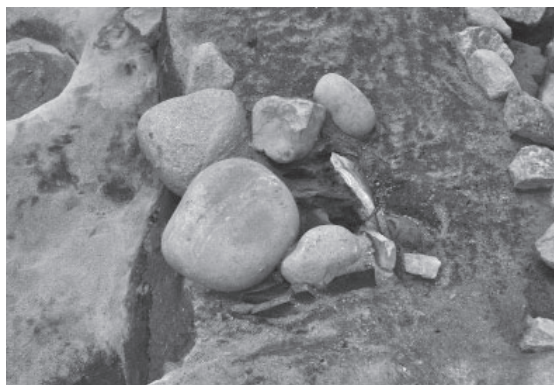


S X36（南西から）

図版 2



S X36 (南東から)



S X37上層 (北西から)



S X37下層 (北東から)



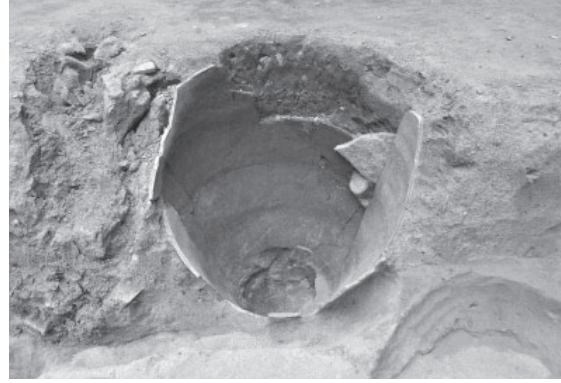
S X23 (南西から)



2区第1面全景 (北から)



S D19南端石組（北西から）



S X68（北西から）



S X81（南東から）

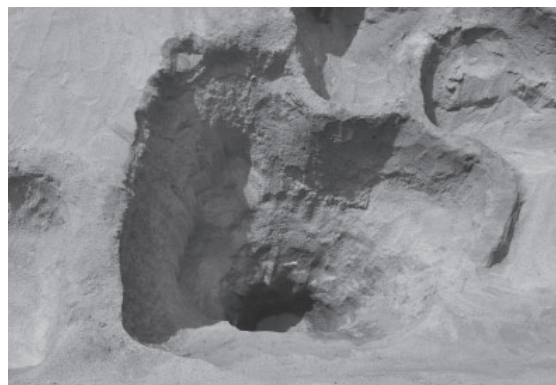


1区第2面全景（東から）

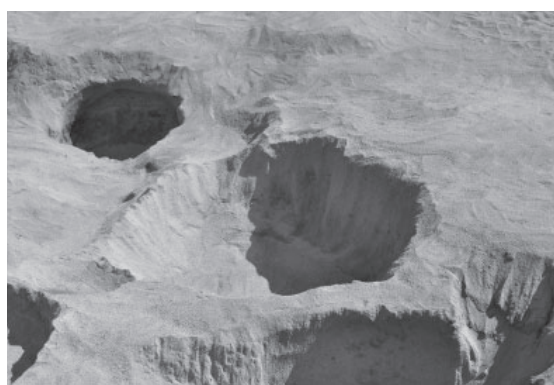
図版 4



1区第2面西半部近景（北から）



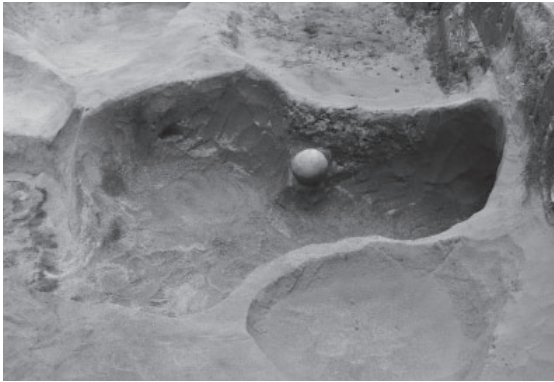
S K 56（北西から）



S K 74（南から）



2区第2面全景（北から）



S K91 (南東から)



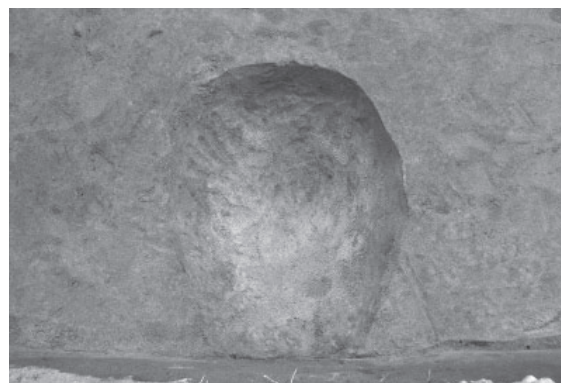
S K93 (北西から)



3区第2面全景 (西から)



3区東壁 (南西から)



S K97 (北東から)

図版 6



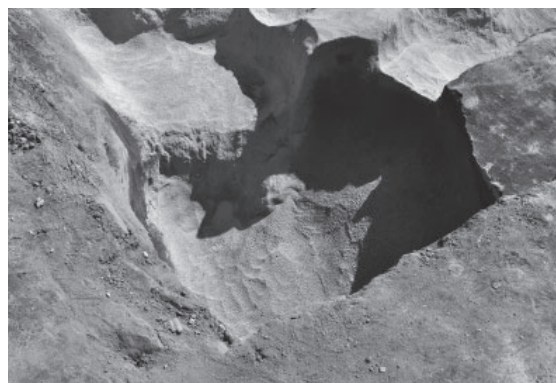
S C99 (北から)



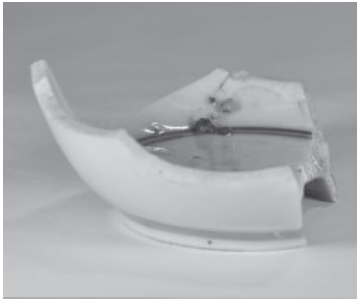
4区第2面全景 (北から)



S K103 (北東から)



S K38 (西から)



1 (S D19)



2 (S D19)



5 (S X36)



12 (S K80)



13 (S K80)



15 (S K85)



14 (S K85)



16 (S K85)

出土遺物 1

図版 8



21 (S K74)



22 (S K91)



23 (S K91)



24 (S K91)



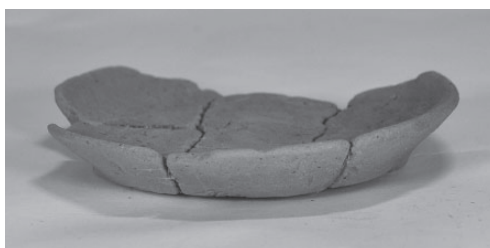
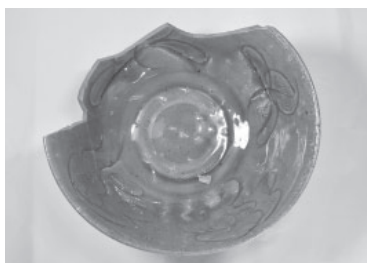
25 (S K91)



26 (S K91)



23・24入れ子状態



29 (S K97)



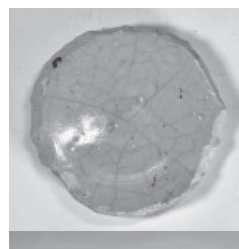
31 (S K97)



28 (S K93)



30 (S K97)



33 (S K103)



35 (S K103)

出土遺物 2



36 (S C99)



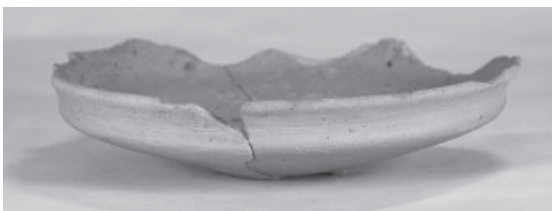
37 (S C99)



38 (S C99)



39 (S C99)



40 (S C99)



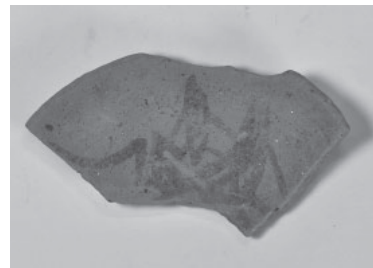
43 (S C99)



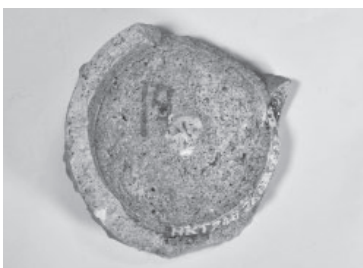
44 (S C99)



46 (S C99)



47 (2区第2面)



48 (2区第2面)



49 (S K29)
出土遺物 3



50 (S P41)

報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多199							
副書名	博多遺跡群第248次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1512集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はかた 博多遺跡群 第248次	福岡市博多区 上川端町47、48、 49-2、12-2	40132	0121	33度 35分 36.83秒	130度 24分 37.72秒	20210622 ～ 20210930	323.46	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群	集落跡	古墳～近世	竪穴建物、 溝、土坑、井戸、 石組、ピット	土師器、中国産陶磁器、 銅銭、近世陶磁器・瓦				
要 約	博多遺跡群は、博多湾岸に沿った3列の砂丘上に立地する複合遺跡である。今回の調査地点は最も内陸の砂丘の南西部、櫛田神社の北隣に位置する。敷地の北側に位置する旧冷泉小学校跡地内では、中世博多の港湾施設とみられる石積み護岸が検出されている。また付近一帯は鎌倉時代後期に設置された鎮西探題の推定地とされており、中世博多の最重要地域である。今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物・土坑、平安時代末期の土坑、江戸時代の瓦組井戸・土坑・石組遺構・溝を検出した。出土遺物は布留式の土師器甕・小型丸底壺、平安時代末期の中国産磁器碗・銅銭（大観通宝）、土師器皿、江戸時代の染付・瓦・銅銭（寛永通宝）などコンテナ60箱分である。							

博多199

－博多遺跡群第248次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1512集
2024（令和6）年3月22日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 ロータリー印刷株式会社
〒810-0075 福岡市中央区港2-8-9